

平成三十年度「全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会」

(知事賞) 奨励賞

私がかっていた水、知った水

松山市立久米中学校 二年 平岡 瑞季

私にとって水というものは無色透明できれいなものであり、蛇口をひねればいつでも出てきて、いつでも使えるものでした。身近にあるのが当たり前で困ることもなく深く考える機会がなかなかないのでした。

そのテレビ番組を見たのは小学校五年生の時だったと思います。展途上国の子どもたちの生活に視点を置いたドキュメンタリー番組でした。そのテレビの中の子どもたちは、朝日が昇る前に起きて大きな瓶を肩に担いで水を汲みに行くことから一日の生活が始まりました。何キロも離れた水場に歩いて行き、水を汲んで重くなった瓶を担いで帰ります。汲んだ水は私が生活として使うのに知っている透明な色ではなく、茶色く泥の混ざったような色でした。それを沸かして飲み、食事を作るのに使用し、身体を洗い、衣服を洗うのに使用します。朝汲んだ水は昼過ぎには無くなり、女性と子どもたちは瓶を担いで水を汲みに行きます。一日の大半を水を汲みに行く作業に費やします。当然、子どもたちは学校には行けなかったり、勉強を満足にすることはできません。不衛生で安全でない水を飲むことで下痢や伝染病などの病気にかかりやすくなります。子どもたちは、私がかやく手に入れる水を時間と労力をかけて手に入れ、勉強や遊びに費やす時間を犠牲にしていました。番組では、世界では安全な水を確保できて

いない地域がまだまだあり多くの子どもたちが不衛生な水が原因で命を落としていると言っていました。

私はそれを見た時、私にとっての水と彼らにとっての水の価値観の違いに衝撃を受けました。そして少し申し訳ない気持ちになりました。何の苦労もなく生活していることに、それまで気付かなかったからです。その時母が私に

「日本は豊かな国で必要な時に必要なだけ水が飲めて使えるね、幸せなことだね。それが幸せだって知らないのと知るのではこれからが全然違ってくるよ。人間は水がなくては生きていけないからね。水に恵まれているってことが生活の目に見えない部分へも影響をどれだけ与えるか、少し分かったんじゃないかな。」と言いました。

私はそれから水に対しての考え方が変わりました。私たちの生活には水は欠かせません。食事も入浴も洗濯も排泄にも水は必要です。水が確保されていることで私は、学校に行けて勉強や部活に時間とエネルギーを費やし、友達と交流し充実した日々を送れています。やりたいうことができないこと、思い通りにならないことに不満を持つたり足りないことに目が行きイライラしたりする時もあるけど、そういう時に思い出すようにしたいです。水が確保されていることを当然だと思わず、水に感謝し、意識して大切に使用することを心掛けていかなければなりません。そして私が今できることに精一杯エネルギーを傾け、努力し生活していききたいです。